

令和 6 年 2 月 22 日

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究A	
校園コード (代表者校園の市費コード)	
661456	
選定番号	125

代表者	校 園 名 :	大阪市立今里小学校
	校園長名 :	松永 かおり
	電 話 :	06-6981-8800
	事務職員名 :	栗田 有加
申請者	校 園 名 :	大阪市立今里小学校
	職名・名前 :	指導教諭・齊田 俊平
	電 話 :	06-6981-8800

令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和5年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	継続研究 (2年目)
2	研究テーマ	子どもの可能性を引き出す「個別最適な学び」「協働的な学び」の追究 ～教育DXの推進と1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインの構築～			
3	研究目的	<p>本校では、令和元年度より、研究テーマを「ICTを活用し、共に学び共に育つ授業を創造する～情報活用能力育成を目指した主体的で対話的な深い学びの実践～」とし、大阪市標準の機器環境に加えて、がんばる先生支援の活用により機器環境を充実させ、日常的に1人1台端末を活用した実践を積み重ねてきた。この取組から、2021年に教育工学会(JAET)より「学校情報化先進校」に認定された。また、2022年にはパナソニック教育財団において、実践研究校に選定された。今後に向けては、大阪市教育振興基本計画の最重要目標にも掲げられる「多様な児童の可能性を引き出し、ゴール設定型学習と『個別最適な学び』『協働的な学び』につなげることで教育DXの実現」を目指す。そこで、これまでのICTを効果的に活用した実践をもとに、学習の基盤となる児童の資質・能力を育成し「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行い、1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインを生み出す。具体的な3つの取り組みを以下に示す。</p> <p>1. 児童の情報活用能力を図る指標として作成した「情報活用能力チェックリスト2022年版」を更に改良し、児童の実態に応じたものに改善する。</p> <p>2. これまでに取り組んだ実践に、1人1台端末を生かした実践を基盤に組み合わせた実践により、年間をいつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSコシツ 9.5※1)</p>			
4	取り組んだ研究内容	<p>○児童の情報活用能力の育成、教員のICT活用指導力の向上、教育DXの実現を目的に、全教職員がICTを効果的に活用した授業改善を行い、研究授業を行った。</p> <p>○児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れ、児童が自己で学習を調整する姿の実現を目指した。自己調整学習に関わる理論については、園田学園女子大学の堀田教授や桃山学院教育大学の木村准教授を招聘し、概説や事例をもとに指導助言をいただくことで、研究の方向性を明確に示した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月 研究推進委員会全体会 小小連携【東中本小】(両校の教員における実践に向けた事前打ち合わせ)オンライン交流 ・5月 離島(鹿児島・長崎)との遠隔教育(遠隔交流の実施に向けた教員打ち合わせ)オンライン交流 授業研究会(5年家庭科: コラボノートを活用した学習計画の立案) ・6月 授業提案・研修会(4年国語科: 自己調整学習を取り入れた児童主体の学習) ・7月 授業研究会(5年理科: Googleスプレッドシートを用いた学習の振り返りの共有) 小小連携【東中本小】(実践の成果や課題について・実践事例の作成)オンライン交流 ・9月 授業研究会(3年算数科: コラボノートを活用した思考の共有化) ・9月 授業研究会(1年国語科: コラボノートを活用した発表資料の作成) ・10月 授業研究会(4年理科: 実験動画を貼り付けたデジタルワークシートの活用) 授業研究会(特別支援算数科: 発表ノートを活用した図形の作図) ・11月 がんばる先生支援事業 研究発表会(3年社会科・総合: 遠隔交流に向けた協働的な学び) ・2月 総合研究発表会公開授業(2年特活: SKYMENU「気づきメモ」を活用した思考の共有・整理) (6年体育科保健領域: 思考ツールを用いた思考の可視化) <p>○年間の研究計画を立案し、各教員における研究授業を計画的に実施していくことで研究を深めていった。研究協議会では、教員がコラボノートを活用して成果や課題を共有し、本時の改善策を全体で共通認識した。また、協働学習ツールで常に課題の見える化を図り、課題意識を持つことで、研究におけるPDCAサイクルを活性化した。教員の授業改善を促進することで、日常における教科学習指導に変容をもたらした。</p> <p>○外部講師を招き、研究会や協働学習ツールを効果的に活用した先進的な実践を積み重ねていくことで、教員の継続的な学びを支える環境を整え、教員全体の授業改善に関わる意識の向上につなげた。</p> <p>○学期ごとに児童・教員の情報活用能力チェックシートを実施し、その結果を分析・共有することで、学年の実態把握や次の学期に向けた改善を図り、授業改善に向けて組織全体で進めていった。</p> <p>○本校における先進的な実践事例が評価され、NHK for School「オープncラス」の番組で体育科における実践が取り上げられ、実践動画や実践における指導案、活用シート等がHPに掲載されるなど、全国に向けて本校の取組を発信することができた。</p> <p>○研究の3年目を見据え、R5年度から総合的読解力育成の観点を含んだ指導案を作成し、校内研修を通じて教員全体の授業改善に活用することを目指す。令和6年度からは研究の成果を次のように示す。</p>			
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	日程	令和 5 年 11 月 22 日	参加者数	約 20 名
		場所	大阪市立今里小学校		
		備考			

6	成果・課題	<p>大阪府教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>【見込まれる成果１】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>個で取り組んだ「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、その成果を「個別最適な学び」に還元するサイクルを確立することで、児童の情報活用能力とそれを支える言語能力、問題発見・解決能力の向上をめざす。</p> <p>《検証方法》</p> <p>学力経年調査の国語科の記述式の回答結果において「自分の考えを書く」出題分野の正答率を６０％以上にする。また、学力経年調査や年度末の校内アンケートにおいて「学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができていますか。」に対して肯定的に回答する児童の割合を９０％以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、互いに何度も往還することを意識した授業デザインを年間を通じて実施することができた。また、「個別最適な学び」や「協働的な学び」をより充実させるために、ICTを積極的に活用し、日常の教科指導においてICTを効果的に活用した。</p> <p>○学力経年調査における「自分の考えを書く」の正答率の結果は、【３年生：89.1％】【４年生：93.4％】【５年生：60.2％】【６年生：71.4％】であるなど目標を上回った。</p> <p>○校内アンケート「学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている。」の肯定的な回答の割合は、92.3％であるなど目標を上回った。</p> <p>○校内アンケート「わかるまでくりかえし勉強をがんばっている」の肯定的回答は89％と、学習計画の見通しを持ち、粘り強く取り組むことで、主体的に学習に取り組む態度を養った。</p> <p>【見込まれる成果２】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>児童が主体的にＩＣＴを活用し、協働的な学びや言語活動を行うことによる児童の情報活用能力の向上</p> <p>《検証方法》</p> <p>児童に対し情報活用能力チェックリストを年度当初、および年度末に実施し「情報活用」の項目において、全学年とも事後の平均を90％以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>○児童アンケート「ICTを活用した学習を進んで取り組んでいる」についての肯定的回答は82.5％だった。各教科においてICTを活用する場面が日常化する中で、児童の意識は、端末の活用が当前に感じられるようになったことが考えられる。端末の導入時期のような高い数値が示さなかったが、教員が意図するICTの活用場面は、グループや学級全体での多様な情報に触れられる協働的な学びの場面など、ICTを効果的に活用する場面へとシフト変更した。これらのことから、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図ることができた。</p> <p>○研究授業における指導案の中に児童の情報活用能力チェックリストの結果分析を盛り込み、児童の課題把握を図るとともに、課題解決に向けた授業実践を実施することで、児童は自分自身の情報活用能力を自己評価し、成果を感じ取ることができた。また、教員は研究授業だけでなく、日常の学習指導にも情報活用能力育成を視点に授業実践を行い、児童の情報活用能力の育成を図った。</p> <p>【見込まれる成果３】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>教職員のＩＣＴ活用スキルや授業力の向上</p> <p>《検証方法》</p> <p>教員のＩＣＴ活用指導力アンケート（文科省「学校情報化調査」）において、すべての項目における平均値が３．５以上となるようにする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>○校内調査「教員のICT活用指導力チェックリスト」の結果は、肯定的回答は100％と高い結果だった。今後実施予定の文部科学省による調査においても3.5以上となる見込みである。</p> <p>○教員のICT活用場面は多岐に渡り、授業外では、週に１回の児童朝会や児童集会においてオンラインと対面を状況に応じて使い分けるなど、柔軟に対応することができた。また、年間を通じた遠隔交流学習では、鹿児島県や長崎県の離島との遠隔授業をすべての学年で実施するなど、遠隔ツールの活用など活用力だけでなく、遠隔交流学習における授業デザインも計画立案するなど、授業力・指導力が培われた。さらに、家庭学習におけるICTの活用や協働学習ツールの活用、教室での学習指導におけるICTの効果的な活用など、本校で活用する５種類以上の協働学習ツールを用いながら、児童の実態や状況に応じて有効的な活用法を選択することができた。</p>
---	-------	--

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>○ICTを活用したこれまでの実践を整理し、学習の基盤となる資質能力を育成し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と、1人1台端末を生かしたカリキュラムデザインの一般化。</p> <p>《検証方法》</p> <p>1人1台端末活用の年間計画・単元計画を作成し、HPIに公開し一般化を図る。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>○日常の教科指導におけるICT活用の様子は、一日に1アップ以上更新する学校ウェブサイトに掲載し、校外へと広く発信した。</p> <p>○令和3年度から更新するICTの年間活用計画をもとに系統的な指導を目指すとともに、各学期ごとに実践の見直しを行い、計画の改善を図ることで、令和5年度版のICT年間活用計画を完成させることができた。</p> <p>○人事異動による教員の入れ替わりが激しい実態を考慮し、誰が担任になっても継続できるシステム化を図り、ICT年間活用計画をはじめ、実践事例や指導案、協働学習ツールによるデジタル教材の継承などを行い、持続的な研究体制を構築した。</p>
		<p>【研究全体を通じた成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>＜成果＞</p> <p>○「情報活用能力チェックリスト2022年版」を活用することにより、一人一台端末を活用する場面にあった情報活用能力を身に着けることができた。</p> <p>○日常的に1人1台端末を活用し、情報活用能力チェックリストで見えた課題をクリアできるような内容を組み込んだ単元構成を工夫することで、低学年から系統的に情報活用スキルを身につけさせることができた。中でも「操作スキル」についての肯定的な回答を90%前後まで引き上げることができ、チェック項目に追加したオンライン学習に必要なスキルも身に付けることができた。</p> <p>○教育DXの推進においては地理的制約に関わらず、遠方の小学校と年間計画を元に打ち合わせをすること</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>＜成果＞</p> <p>○個別最適な学びの実現に向けて「指導の個別化」「学習の個性化」の重点的な指導を行った。指導の個別化では、支援の必要な児童に対して教員が重点的に指導を行い、児童自らが学習を調整できることを目指した自由進度学習を取り入れた。また、児童の高い情報活用能力を発揮させ、ICTを活用することで、児童一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法や教材、学習時間等の柔軟な設定を容易に実現することができると、本校の強みであるICT活用を最大限に生かすことができた。また、学習の個性化では、これまで身に付けた情報活用能力や問題発見・解決能力を土台とし、児童一人一人に応じた学習活動や学習に取り組む機会を提供するなど、探究的な学びの学習デザインを図り、児童自身が学習が最適となるよう調整</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>本校では、個別最適な学びを「協働的な学び」につなげ、教育DXの推進の実現を目標に「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善に取り組んできた。年間を通して教科横断的に情報活用能力の育成に取り組み、遠隔交流や遠隔合同授業を通して、様々な考え方や実態に触れることで、大阪市教育振興基本計画にもある「多様な児童の可能性を引き出す」ような授業実践を進めることができ、深い学びにつながった。本年度も園田学園女子大学の堀田博史教授にご指導いただき、取り組みの視点や目指す方向性をご教示いただき、教員の授業力の向上も図ることができた。日々の学習で一人一台学習用タブレット端末を活用することで、どの学年の児童も情報活用能力のスキルアップができた。今後もさらなるスキルアップを目指して、研究を継続していく。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>2年目の研究を通して、児童の情報活用能力とそれを支える言語能力、問題発見・解決能力の向上を図ることができ、児童が主体的にICT機器を活用し、協働的な学びや言語活動を行う力を培うことができた。また、研究の成果として、教職員のICT活用スキルや授業力の向上が図られ、日頃の授業場面をはじめ他校との遠隔交流学習での活用以外にも児童朝会、児童集会、家庭学習におけるICT機器の活用及び協働学習ツールの活用など、児童の実態や状況に応じて有効に活用することができた。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>